

# 習得・活用の学習を実践から考える —国語科からの提案—

お茶の水女子大学附属小学校  
阿部 藤子

## 1 「習得・活用」の学習とは

二〇〇八年、中教審の答申が出されて以来、「習得・活用」の学習について様々な論考や実践が紹介されている。私は、何か新しいことをしようとするのではなく、これまで自分がしてきた実践を「習得・活用」の視点からとらえ直して、そこから始めるべきではないかと思う。

例えば、意見文を書く学習で、基本的な意見文の構成の仕方を知り、根拠を挙げて考えを書く学習をしたとする。これは、意見文の基本的な書き方を「習得」する学習と言えるだろう。この学習をふまえ、あるテーマについて根拠を挙げて反論し紙上討論をする、という学習は、「活用」に当たると言えるだろう。「習得・活用」は、それぞれがある一時間の授業、あるいは単元ではつきり分かれるわけではない。どちらも双方向で行きつ戻りつし行わ

れているというのが実際ではないだろうか。

授業で大切にしたいことは、

- ・身につけさせたい力を明確にする。そのための学習材、学習方法を工夫する。
  - ・「習得」においても、知識、技能を教え込むというより「受信する↓考える↓発信する」ことを行いたい。
  - ・友達との関わりを大切に、学び合う学習にすること。
- と考えている。

## 2 実践例1 (小1)

ことは遊び絵本からことばを広げる学習

〔絵本〕『くりくり』

(ひろかわさえこ 作・アリス館) より

### ①単元について

『くりくり』は、「くりくり」ということば(ゆくり、ずんぐり、びっくり等)で主人公の「くりくり」という栗の様子を表し、短いストー

リーになったことは遊び絵本である。擬態語・擬音語で人物の様々な様子を表せるおもしろさがあり、テンポよくリズムに乗って話を楽しめる作品である。

この絵本を元にして、

- ・語彙の拡充
- ・経験したことばにことばをつなげ、お話作りを楽しむ。

この二点をねらいとして学習を行った。

### ② 学習指導計画(6時間扱い)

- ・「くりくり」のことばを集めをする。絵本『くりくり』の読み聞かせを聞く。(1時間)
- ・「どんなふうのことば」(擬態語・擬音語)を集めてみる。(1時間)
- ・集めたことばを使って遠足のときのうたを作り、本作りをする。(3時間)
- ・発表会を行い作品を読み合う。(1時間)

## 3 実践例2 (小1)

絵本から想像の世界を広げる学習

〔『きよだいな きよだいな』〕

(長谷川摂子 作・降矢なな 絵  
福音館書店 子どものとも) より

### ①単元について

『きよだいな きよだいな』は、「あったとき、あったとき ひろい のつばら どまんなか」という語りかけから始まり、広い野原で

百人の子どもたちが空想の世界で遊ぶ、様々な場面をリズムに乗せて語っていく物語である。前述の『くりくり』でのリズムをからだに刻み楽しむ学習をふまえ、この作品では、  
・発想のおもしろさに気づき、空想を広げる楽しさを体験する。

・リズムに乗って創作し、イメージしたことをことばで表す。

ことをねらいたいと考えた。

②学習指導計画（14時間扱い）

・大きくなる話を集め、いろいろなお話を読む。（2時間）

・絵本『きよだいなきよだいな』を読み、学習の見通しを持つ。（おはなし作りをしよう・スーパービッグブックを作ろう）

・『きよだいなきよだいな』のおもしろいところを話し合う。（2時間）

・お話を作りグループ内で紹介し合う。（5時間）

・各自の本作りとスーパービッグブックを作り、発表会を行う。（5時間）

・絵を描くなどは「なかま」（生活科）の時間に行く。

③学習の様子と考察

子どもたちは、休み時間にも「あつたときあつたとき」を口ずさみ、体を揺さぶりながらこのリズムを楽しんだ。

この学習の最初に『きよだいなきよだいな』をビッグブックで読み聞かせたことから、子どもたちはその大きさに喜び、自分たちでもっと大きなスーパービッグブックを作りたいと言いだした。自分たちの作った空想のお話で大きな本を作る計画になったのである。



あつたとき あつたとき  
ひろい のつばら どまんなか  
きよだいなえびが あつたとき  
こどもが40人やつてきて  
えびのひげにぶらさがった  
そしたら えびが 目をさまし  
のしのしどすどす おつてきた  
みんな きゃっきゃとにげたとき

右に、子どもの作品を載せた。この子どもが最初に考えたのは、「こどもが40人やつてきて」のあとは、「ぜんぶえびをたべたとき

いっぱいたべすぎて おなかがばんくしたとき」であった。教師は、「えびは子どもよりずっと大きいんでしょ。どんなことしたい？ 生きていたらどんな動きをするかな？」と巨大なえびが目の前にいたらどんな様子か想像してみようという気持ちでアドバイスをした。巨大な伊勢エビだろうか、上段のように、書き換えて持ってきた。原作にあるように、その巨大なものに子どもたちが大勢で関わって、とんでもないことが起こるといふ仕掛けにのせてお話をふくらませたのであろう。

一年生の国語の学習は、いわゆる言語事項の習得に多くの時間を費やす。しかし、低学年のうちに、たくさん日本語のリズムをからだに刻ませたいと思っている。そして語彙を広げ、自分の経験や想像をことばと結んで表現する学習こそが、この時期に必要な言語経験の積み重ねではないだろうか。重要なのは、何が「習得」でどこが「活用」かとすみ分けすることではなく、子どもたちにつけさせたい力を見極め、そのための学習材を工夫し、つけられた力をどう生かしていくか、ということを追求していくことだろう。

あへ ふじこ お茶の水女子大学附属小学校教諭。教科書のみならず、絵本、雑誌、新聞などから学習材を得て学習を組織したいと考え、日々実践し授業研究に取り組んでいます。